

り他に無きものと妄信する如き人の量見の狭さよ。請ふ先づ短詩の内に客觀的・天然詩あることを知れ。而して尙ほ之を叙景詩と呼ぶことの不可あらば何ぞ詳かに之を教へざる。(明治二十九年三月 日本新聞)

俳句内容の量の變化

進歩か退歩か我之を知らず。駭々として留むべからざるは、物の變化なるかな。然れども歴史は夫れ自身を繰りかへす。昨の進歩は、豈今の退歩に非る無きを保せんや。されば新たに旗旆を翻すもの、亦決して自ら新たなること能はず。長く

管底に世人に忘れしものも、亦古人の手垢を止む。之を探ぐり出して世を偽かんとする心の陋や、吾人世の輕々しく言を新にするものを惜む。

越え行く峯々の脈を同うして、日將に暮れんとす。人生の功業多く白髪を以て繼ぐ。しかも潮流は船を運んで、到るところに到らざれば止まず。流れ乍ら木の葉の船に棹す人を、愚と笑ふこと勿れ。時勢は個人の力の支配すべきに非るなり。進歩か退歩か暫くこれを不問に附せん。唯俳句に於ける變化について見る、亦快ならずとせず。

假令は彼の連歌より一變して貞門となり、再變して檀林と

なり、三變して正風となりしが如きは、蓋し變の大なるものなり。虚粟の冬の日、春の日となり、猿蓑となり、炭俵となりしが如き、亦變の小なるものとせず。更に元祿調の天明調となり、天明調の明治調となりしが如き、殊に緊要なる變化と見るべし。しかも我暫くこれ等の跡を問ふことをやめ、單に俳句の内容の量について觀ん。

荒海や佐渡に横たふ天の川

芭蕉

この句に含まれたる空間と

釣鐘にとまりて眠る胡蝶かな

蕪村

この句に含まれたる空間との廣狹を對照するときには、誰れか十

七字に含まるべき空間の量には變化極りなく、際限なきことを知らざらんや。唯其の空間廣さはほど描寫の筆粗大に失す。若し描寫の筆を精細にし、其の印象を明瞭ならしめんとする時は、空間次第に狭きに傾くは、勢の免れざるところなり。然れども、或程度までは空間の廣さを保ちつゝ、精細の筆を用ゆるを得べし。即ち助詞或は關係詞を略し、詞の轉倒に特に留意する時は、一種の技術として、縦横の記叙を得ざるに非ず。しかも其結果や往々にして、一派の人には尤も怠まかいなる、侘偈なる調に偏し、なだらかなる、優美なるものは、見るごと、妙さに至るを常とす。

天明の句には總じて印象の明白なるもの多し。或ものは印象の明瞭と餘韻とは相伴はざるものとなし、殊に印象の朦朧たるを偏賞す。これ大なる誤なり。餘韻は連想に基く、情感の天地なり。されば決して朦朧と同日に論すべきに非ず。假令は墨畫の粗筆の山水に對するも、又濃厚なる油畫の山水に對するも、共に或趣味にして傳へらるゝ以上は、餘韻二つ乍ら全しといふべく、爰に至て餘韻豊にして印象明瞭なるものを撰むに至るは、自ら争ふべからざるどころ、元祿の天明に一變せしもの蓋し爰に基く。

要するに時代を經過するにつれ、人智は漸く漠然たるものに安んずるを能はず、物として精緻に赴くは自然の數なるが如し、美に對する所感又斯の如し。人事詩に類型を賤しみ、個性を貴とむが如き、其の顯著なる一例なるべく、これ一人智の精細に赴くと、陳腐を避けんとする自然の趨向に基す。されば俳句の内容も、漸次内に充實して、外に縮小するに至るは、争ふべからざるの傾向にして、若し内に充實せしめ、ついに外に縮小せしむることを厭はば、先づ句調の信屈に陥り、終に十七字の形を破裂せしめずんば止まざるに至るべし。

我れ嘗て以爲く、十七字詩は時間を寫すに利あらず、又主觀

を描くに適せず、繪畫と一般、時間なき空間の描寫に於て特に秀づるところありと。然れども若し夫れ俳句の技能單に爰に終らば、俳句は繪畫に一步を踰するものなり。繪畫は色彩(光線)によつて爲る。色彩は物の形を顯す以爲而してこれ最も俳句の短所とするところ。俳句終に繪畫の輪廓にして終らざるべからず。然れども幸にして、俳句は斯の如く不機能のものに非ざりき。然り俳句は客觀を貴とむと共に、又主觀を貴とみ、空間を重んずると共に、又時間を重んず。即ち同心客觀描寫の上に在りても、俳句の繪畫に勝るところは、實に主觀を以て客觀を助くるところに在り、時間によつて足らざる

るところを補ふに在り、其の色彩に於て及ばざるは、やがて其の主觀及時間を以て勝る所以なりき。假令は

紅葦に山裾しるき芝生かな

白雄

『山裾しるき』といふ主觀は、繪畫に於ては極めて複雑なる筆を要すべきところを、極めて簡單に現はすものなり。然れども是れ繪畫の共にすべきところ、未だ俳句の特技を現はすものに非ずといへども、

故郷や酒はあしくも蕎麥の花

蕪村

蚊帳をしに鬼を鞭つ今朝の秋 (病起)

同

に至つては、乃ち繪畫なるもの、又庶幾すべきところ、に非

ざるべし。主観はやがて時間に伴ふ。又空間も嚴密に之を言へば、時間を離るべきものに非ず。吾人が瞬時に網膜の黄點に寫すところは、實に針頭の一點に非すや。時間の補助を借りてはじめて蚤の全体を認むべく、又一本の煙管を認むべきなり。夫れ然り、廣大なる空間、若くは精細なる空間を寫すには、必ず時間の補助を借りて、記叙の統一を需めざるべからず。こゝに於てか内容に於ける時間の量の論起る。

蕪積んで廣く淋しき枯野かな

尙 白

の如きは、よし空間を想像する上に時間を要すとは雖も、先づ純粹に空間を叙したるものとして差支へなかるべし。一步を進めて

ことしげく白ふむ軒や懸煙草 (田家)

太 祇

に至れば、已に白ふむなる動の上に、多少の時間を含めると勿論なるべし。更に進んで

油さし／＼つゝ寐ぬ夜かな (不蓮戀)

鬼 貫

に至つては、愈々時間が緊要なる分子となり居ることを認むべし。又

日がへりの兀山越ゆる暑さかな

蕪 村

なる句に於いては、其の已に兀山を越ゆるのみにて、暑さこ

とには充分の同情を惹起しつゝあるに、更に『日』がへり』なる
詞によりて、一層有力ならしむる働を見るべし。これ巧に時
間を寫すものに非ずや。

天明に在つても、殊に蕪村の句の如きは、内容最も充實して
又すこしのたるみを見ず、これ空間の記叙精細なるによる
ものも亦多しと雖ども、主として人事若くは主觀を配し、時
間的に充實したるものに非ざるなきを得んや。而して斯く
時間的に内容の量を増す結果は、空間の場合と同じく、先づ
調子の侘屈を來し、終には十七字の外形に甘んぜず、蟬脱し
て一新体を爲さざるべからざるに至る。

夫れ俳句の内容、空間的又時間的に外に擴張せんとし、又内
に充實せんと傾く、其の結果はいかゞなるべき。元祿より天
明に移りたる時には、未だ甚しき侘屈に陥らずして、尙ほ十
七字内に一變化(或はこれ一進歩)を試みたりき。天明より明
治に移りては、果して如何なる變化を來すべき。已に侘屈な
る形は現今多少の萌芽を顯はしつゝあるに非ずや。俳句と
してこの侘屈なる形は果して喜ぶべきものなりや。抑も亦、
侘屈なる形を脱して、十七字の屋外に立ち出づべきか。唯、こ
れ茫漠たる廣野、夕風渡る芒の穂を分けて、吾人は何所に別
に塀垣を築くべき。更に見棄てたる小屋を顧みずんばあら

さるべし。

一度立ち出で、又顧みるものは陋なるべし。吾人は早晚俳句を蟬脱して、別に羽翼を具ふる一「新体」を見るべきことを信ず。人あり頃日の吾人の句を呼んで邪道に陥れりとなす。真なるかな、吾人自身亦時に邪道に陥るなからんやを恐る。しかも恐れて而して顧慮するごとに、又吾人の怯と陋とを叱咤するものあり。吾人は小屋の戸隙より茫漠たる荒野をかいま見つゝあるものなるかな。

遮莫俳句は尙ほ亡びたるに非ず。否尙ほ未だ容易に亡ぶべきものに非ず。強いて内容に變化を需め、調の佶屈を喜ぶべきに非ず。單純なる山川草木又人事の趣味の滅せざる限りは、俳句は尙長き運命を保つべし。こゝに俳句の壽を爲し、暫く筆を擱すといふ。(明治三十九年十一月、日本人)

『日本人』に俳句を募集するの文

桔梗刈萱、女郎花、紫苑には鬼のしこ草の名もありて、様々に咲き亂れてこそ、秋の野面も眺めあれ。其の我園には桔梗のみを植ゑよ、我庭には朝顔のみを育てよといふはまたよし。刈萱を殘して他の草を刈り盡せ、この野面に女郎花の外を止むべからずといふものあらば、誰かそを花を愛するもの

といはん誰れかこれを狂人といはざらん我れ野人にこの狂なきを知り又園丁にこの愚なきことを知る而して獨り文園にこの狂に類しこの愚に類するの言を爲すものあるを恐る。

汝若し心に疑ふことあらば先づ汝が柴門の繩を解け汝が柴門の繩は汝自ら結びたるなり柴門の外に在るもの之を解くこと最も難く汝柴門の内に在つて之を解くこと最容易なり己にして柴門を出でんか黄菜は黄に綠麥は綠に雲雀は高く鳴き紛蝶は低く飛ぶを見ん又汝が草履の蹈むところは決して春草の青きのみならず堇蒲公英五形花の花

の形も異に色も香も殊なるものが心地善く美しく點々として咲き交りたるを見るべししかも尙ほ眼を留めて見れば同じ堇の花にも瓣あり萼あり蕊あり一輪の花の瓣は他の一輪の花の瓣と其の數を同らし其の位置を同らすべけれども精かに之を較する時は其の相似たるが如き形に於ても多少同じからざるところあるを發見し色に於て更に濃淡の差異あるを見ん爰に於て汝が狭き胸裡の小なる疑團は氷解せんのみ汝が柴門の繩はやがて汝が胸を縛りたるものなりしなり。

俳人に非ざる詩人の俳句を排し又之を輕んずるを難し俳

人の俳句に非ざる詩を解せず、之を重んぜざるを難ざる我は、果たして撞着の言を爲すものなりや。我は俳人に非る詩人の俳句を味ひ、俳人の俳句に非ざる詩に指を染むるの、互に利あることを知りて害あることを知らず。

俳人とは十七字詩人なり。故に彼は勉めて十七字詩に恰好なる詩想を涵養す。故に其の觀察するところも、亦多くは十七字に謠ふに恰好なる天地なりと雖も、俳人悉く手水鉢の牙々然たる月並俳人に非る以上は、彼等も亦柴門の繩を解いて、黄菜綠麥を見るものなり。口を開いて乾坤の霞を吸ふものなり。數千萬言を要すべき大思想の、磅礴として自ら形

を爲しつゝあるもの非るにも限らず、我れ故に嘗て俳人が十七字の小閣に一生を籠居せざるべからずと思惟するの陋をいふ。是を以てわれ既に俳句に厭き、俳句を輕んじ、俳句の作者たるを辭せんとす。傳ふ如きは非なり。我、豈生を終るまで此愛すべき小閣を棄てんや。唯小閣の戸は敢て開放することを辭せずといふのみ。然りこの小閣に生れたる小俳人にして、又驚天動地の大思想を有することを、私に諸君に誇らんと欲す。諸君は俳人たる。余が俳句に非ざる詩を作りたりとて、決して我を責むるものに非ざるべし。呵。

鬼まれ俳句にあらざるものを作りたる俳人は、俳人に非ず

といふの理無きが如く、俳句を作る戯曲家小説家は、戯曲家小説家に非ずといふの理も無きことなり。故に我若し或戯曲家小説家に向ひ、試に俳句を作らずやと勸むることありとも、人決して之を尤めざることを知る。

花に住む鶯、水に住む蛙も歌を讀むとは古き喩へながら、或方面より見れば、人間は悉く詩人なりともいふことを得べく、唯自ら認めて我は詩人なりといふものを、世人も亦特に詩人なりといふに過ぎず。我は自ら認めたる詩人を重んずると同時に、又自ら認めざる詩人を愛す。若し俳句なるものが果たして詩想を盛るに最も簡易なる器ならば、この自ら

認めざる詩人が、時に自ら認めたる十七字詩人たることも亦極めて妙ならずや。故に我若し自ら詩人たることを認めざる或人に向ひ、試に俳句を作らずやと勸むることありとも、人決して之を尤めざることを知る。

秋草の數多きが中にも、又野菊の棄つべからざるが如く、いろくの詩の數多きが中にも、又俳句の棄つべからざるを、知り、其の俳句を作れど人に勸むるに似たる行ありとも、別に人に尤めらるゝほどの害ありとも覺えざるを、知り、又其の十七字といふ草屋の中に、未來の大詩人が産聲を揚げぬにも限らぬを、知りて、我は本號より本誌上に題を課

し次號より廣く諸君の投寄を乞ふとを始めんとす徒らに繁を好むに非ず句を寄する人に取りて更に害なきのみならず時に或は利あらんとを思へばなり。(明治二十九年十二月、日本人)

明治の俳人

元祿と天明が俳史の二大時期を爲すこと、之に未來を含みたる我明治を加算して爰に三大時期を爲すべきことは嘗て之を陳ぶ其の最後の一大時期たるべき我が明治の俳諧に志さん人は果たして如何なる用意を以て文壇に立つべきか是れ余の諸君に問はんと欲するところのものなり。

芭蕉は俳聖なり然れども唯一の俳聖に非ず彼は一大詩人なり然れども俳界の大詩人豈獨り彼のみならんや天明には蕪村一輩あり我が明治豈また多才子なしとせんや而して特に彼を推すべきものは元祿の昔に生れて新たに正風体なるものを興したる點にあり若し時間(歴史)を離れて見んか芭蕉其角去來なるものあり蕪村曉臺白雄なるものあり其の他尙四五輩を數ふべし況んや句を作する技量に於ては芭蕉時に或は蕪村輩に一籌を踰すると少からざるをや唯芭蕉は元祿の芭蕉なり蕪村は天明の蕪村なり各々其の特質を保つて優に其の地歩を占む我が明治の俳壇に活歩

すべきものは芭蕉に非ず、蕪村に非ず、彼等と相對して明治の特色を代表すべきものたらざるべからず。陋見を抱くもの時代によつて人を批判すべきを知らず、やゝもすれば則ち曰、芭蕉なし蕪村なしと。安んず知らんや、明治の俳壇芭蕉を要せず、又蕪村を要せず。要すべきは芭蕉、蕪村に非ざる。一大偉人なることを。凡そ一事業ある必ず創むるものあり、傳ふるものあり、成すものあり。三者を須ては、じめて全しといふべし。壇林を切り開きて正風の城閣を構へしは、兎も角も元祿の功に歸すべし。凡そ物の進歩は團體によりてなる。先導するものあり、隨

伴するものあり、先導するもの必ずしも師たらず、隨伴するもの必ずしも弟子たらず。人を教ふるは自ら習ふもの人に教はるゝ、身却て能く師を導くとあり。元祿の正風を興せしもの、獨り芭蕉のみの功とは爲すべからず。天明の俳人之を繼いで、彼の斬新なる思想、巧妙なる措辭を用ゆるに至る。豈能く傳ふるものに非ずや。傳へて我が明治に至る。十七字詩は漸く將に陳腐に屬せんとし、或人をして「俳句の變化多きも限りある事にして、俳諧の命脈一縷の糸よりも細しといふべし。然らば其の旗幟を文壇の一方に建つるも、是れ恰も消えんとする燈火が、一ト度赫灼たるが如く、俳諧の末期の

氣焔たるに過ぎざるべし』と言はしむるに至る。或人のみならず
 んや自ら作家として俳壇に立つもの、亦多少この感慨なき
 ものは非ず。然れども余は未だ俄に或人の如く、之を以て直
 ちに俳句を擲ち去り、他の新らしき抒情歌を歌ふべしとは
 いはず。蓋し吾人は三大時期の最後に殿たり、宜しく將に先
 輩の創め傳へたるものを成就せざるべからざる地位に立
 てばなり。

能く之を爲すの道如何。先づ余が第一の希望は、

一、歴○史○的○研○究。是なり。如何なる事情によりて興り、如何
 なる事情によりて盛衰し、以て今日に至りたるか、如何な

る流派に分れ、如何なる俳聖を生みたるか、社會風俗等と
 の關係如何、他文學との關係如何、凡そ是等過去に於てり
 たる俳壇上の總ての出來事を及ぶだけ秩序的に批評的
 に叙述して、其の二百余年間の歲月を繋ぎたる、紛然錯然
 たる絲を撰りわくるものあらば、獨り俳諧の歴史そのもの
 を明にするのみならず、依て以て其の眞價値を知るべく、
 その未來を下するに足るべく、更に徳川文學史を照らす
 一條の光線たらずんば、あらず、之に伴ふて、
 二、俳○句○の○文○學○に○於○け○る○地○位。は又俳人たるもの、虚心
 研究せざるべからざるものたり。俳句のよつてなる所以の

ものより立論して、其の特質を究め、其の價值を明にし、俳句を知らざるものをして、漫に安直文學の名を爲さしむるを、勿れ、俳句果して安直文學か。若し諸君にして、廣く文界に忠なるものならば、何んぞ、赤條々たる俳句の眞價値を、研究して、之を文壇に報告し、併せて俳句を知らざるものに、其の精神を紹介するの勇を鼓せざるか。嗚呼、俳句は果して他の文學の配下に屬するに止るべきか。毅然として立つべき特色なきか。これ等の研究、余の不敏自ら當らんとして、能はざるもの、諸君の聰明に待たざるべからず。

三、出來得る丈、け難多の句を詠出するも、亦明治の俳

人たるもの、忘るべからざる一要件なり。蓋し嘗ていひしが如く、作家ならざる批評家は、往々にして其の肯綮を誤るもの、其の想と詞との間に、殆んど同様の重みを有する。十、七字詩の如き、この傾向殊に甚しとなす。されば、先づ自ら、諸種の句を詠ずるに足るべき技量を具ふるは、前項一、二を成就する基礎として、必要なるは言を須たさるべし。豈に唯にこれのみならんや。苟くも流れを合して、將に之を海に致さんとする、明治の俳人たるもの、元祿、天明兩期の少數なる(余は敢て多數といはず)作家に委任し去りて、その以上の作句を望まざるの陋見をや抱くべき。わらゆる作

家の不完全なる網を漏れ來りし魚鼈を捕へよ。余は諸君の此方面に於ける勤務が尙ほ數十年を要すべきを知らず。之を徒勞なりとするものは弱志の徒なり。然れども亦之を二三年間に於て成就し得べしと考ふるが如きは、輕卒なる思慮といはざるべからず。明治の俳壇は評論家を要すること尤も切なり。然れども決して評論家のみに非ざるなり。又進んで、

四、俳諧の未來を研究し豫言するの責は吾人の双肩にありといはざるべからず。何故に俳諧は腐朽せんとするか。其の精神も亦腐朽し去るべきものか。或は其の滂湃

たる精氣は他の形を需めつゝあるには非ざるか。他の形とは如何なるものか。

俳句は果たして殆んど死文學に屬せんとするか。よし死文學に屬すとすも、埃及の象形文字を研究する學者を、迂愚として一笑に附し去らざる文界は、決して吾人が俳句の研究を怪まざるを知る。況や俳句未だ死文學に非ず。尠くとも其の眞價値の普く文界に知れ渡らざるにて、吾人俳人たるものの責めは頗る重大なるを知るべし。若し元祿天明兩期の詩人が築き上げた城門を開け放して、長く後人の觀覽に供せんとするものたるに思ひ至らば、誰れか其の任

の、遠く、責の重きを思はざらんや。嗚呼、完美の俳諧史を作り、て、之を詩神の脚下に奉納するものは何人ぞ。俳諧の眞價値を論定して、廣く文界に教へんものは何人ぞ。明治の作家として、芭蕉蕪村をして地下に拍案せしむるものは何人ぞ。俳運を卜して、後人をして向ふ所を知らしめ、新詩人を導くものは何人ぞ。吾人は凡て是等を成就するに、尙は許多の年數を要すべし。謂ふ勿れ、俳人將に死せんとするの文を弄すと。將に死せんとするの文は、將に生れんとするの文なり。將に死せんとするの文を研究するものは、將に生れんとするの文を研究するものなり。空に向て徒らに雲を握らんとする

の徒、先づ地に伏して汝か足下の石を驗せ。石も雲も同じく造化翁が一鞭の風子と知らずや。(明治二十九年一月 日本人)

俳句を學ぶの覺悟

三條の大橋より逢坂山を越えて大津に至りし人は、皆三條の大橋より大津に至りし人に相違なけれど、人々について各、其の目指す處の地を問へば、草津に行かんとする人もあるべく、龜山に行かんとする人もあるべく、又東京までもと志す人もあるべし。俳句を作るとは十七字を併ぶるの謂ひなり。其の十七字を併ぶるといふ點に於ては、某甲、某乙もと

より異なる所無けれど、如何なる了見にて十七字を併ぶるやと問はれたる時は、某甲の答へ恐く某乙の答に似ず。御影石の如き頭を有する舊弊の人は、俳句など作るは、碁將碁と同様の道樂なりと蔑視し去る。成程道樂といふ點より見れば、大臣となりて國政を料理するも一の道樂、聖人となりて仁義忠孝の道を説くも一の道樂、獨り俳句を道樂と輕蔑するの謂れなし。若し國政を料理し、仁義忠孝の道を説く道樂が、碁將碁の道樂と異なる點あることを了解すれば、又俳句を作る道樂が、碁將碁の道樂と異なる點あることを承知せざるへからず。

或人は單に樂まんが爲に俳句を作るといふ。誰れか苦まんが爲に俳句を作るものあらんや。然れども若し單に樂しむといふ一點が、俳句を作る理由の總てとすれば、誠に御影石の頭のいふ如く、碁將碁に耽ると更に異なるところを見出す能はざるなり。

我は諸君が、碁將碁と同様の道樂を以て俳句を作るとの了見を、惡しといふの權理なきも、或は草鞋、脚舻にて何故に逢坂山を越えしかを自識せず、早くも坂下の宿引が「お風呂もわいてゐます」との言に迷はされて、終に東京に達することを知らざる類なるなからんことを恐る。

一度俳句といふ途を踏みはじめて、十七字といふ箴笠に、時雨を凌ぐことを知りし以上は、百三十里の果てに、東京といふ都あることを自識して、直進そこに達するの覺悟必要なるべし。

俳句は廣義にいふ詩、漢詩の如き狭き義と混ぜべからず、即ち美文學の一體なり。詩は繪畫、彫刻、音樂、建築と共に美術と稱せらる。美術は美を目的とするの術にして、美は眞と善と共に、總ての學術、技藝の流れては必ず朝すべき三大湖海を爲すものなり。科學は眞を目的とし、道德は善を目的とすること、恰も美術の美を目的とするが如し。

されば俳句は戯曲、小説、詩、漢詩、歌と共に、詩の分類を爲すものにして、科學の分類たる物理、化學等と、其の分枝の位置を同するものなり。

或者は又俳句の形短小なるが故に、他の詩、即ち戯曲、小説に若かずと爲す。もとより短小なるものが、長大なるものに若かざる點は數多あり。然れども、堇の花はどこ迄も、堇の花にて可愛ゆく、牡丹の花はどこ迄も、牡丹の花にて美しきものなるが如く、戯曲、小説は其の形の長大なる點に於て重きを爲し、和歌、俳句の如きは其の形の短小なる點に於て、又特立したる一詩體を爲し、戯曲、小説に侵されざるなり。或者は和

歌は上品にて、俳句は下品なりといふ。これ俳句に上品なるものもあるを知らずして、下品なるもののみを見るが故なり。やがて其の反面は、和歌は俳句より狭くして陳腐なるを免れず。又其の言葉のみは古雅にて美しけれど、其の思想は俳句にも劣りて、下品なるもの往々にして之あり。概していへば、和歌は絹の衣服を纏ひ、俳句は木綿の衣服を纏ふものに似たれど、一度衣を脱したる時は、白く美しき皮膚を有せる美人は、却て俳句の方に多きかもしれず。否余は和歌の古びて敏多きよりも、俳句の若々しくて肉づきたるを喜ぶのなり。

兎に角に俳句は堂々たる美文學の一種にして、美文學の他の種類のものに對しても、決して遜色あるに非ず。諸君は必ず大津にて休まんの近き了見にて、俳句に門出すべからず。必ずお江戸日本橋の橋板をどうくと踏み鳴らして、八百八街を睨み据うる勇氣無からざるべからず。

諸君は神聖にして浸すべからざる詩神に奉侍するものにして、其の詩神の面影を拜するは、諸君等の特權に屬す。其の特權を購ふには、諸君は朝に夕に、風景人事等のうちより、美を拾ひ取るに餘念あるべからず。これ釋迦が壇特山に水酌み木の實拾ひし難行苦行と同心こと、ゆめ道樂などと誤つ

た見解を下すべきに非るなり。(明治三十年一月 ほと、ぎす)

製作と鑒賞

新花摘にいへることあり『善き句といふものは極めて得難きものなり。其角は俳中の李青蓮と呼ばれたるものなり。それだけに千百の句のうち、目出度しと聞てゆるは二十句に足らずと覺ゆ』云々。而して蕪村の句千餘百。そのうち悪句と稱すべきものは極めて稀に、斯く粒の揃へるものは、古往今來唯この人一人を推すべし。是れ口を衝いて出つるところの句、悉く金玉の聲を爲せしか、抑も亦取捨撰擇の力に富みて、

稿を焼くこと屢なりしものか。蕪村は物に拘泥するを芭蕉の如くならざりしもの。しかも尙ほ新花摘の言あり。我は蕪村が製作性の古今獨歩なると共に、其の感納性も優に儕輩に超越せるものありて、彼が句集に多くの屑灰を止めざりしもの、獨り製作性の超凡にのみ歸すべからざるを信ぜんとす。

製作性の能く發達せるものは作者となり、感納性の能く發達せるものは批評家となる。俳句の如き、一觀念を以て直ちに詩想と爲し得べきものは、製作性の力に於て、所謂天才と迄は發達せずとも、或點迄の熟練を以て、或點迄の成功を搏

すること難からざれども、鑒賞力則ち感納性の發達に至つては、あまり多くの人にのびむべからざるものあるが如し。第一流の俳人たらんものは、單り善き句を作ること多きのみならず、又た善き句を撰まんの心掛あること肝要なるべし。(明治三十年五月 ほんゝぎす)

俳句現時の逆運

明治二十九年の文壇に俳句の氣焰最も揚かりしは、是れ將に滅せんとする燈火の一閃光を放つが如く爾りしものと或人は謂ふ。

然り、俳句の氣焰最も揚りしは、洵に昨年(明治二十九年)の文壇なりし。何派々々の呼聲五月蠅く高かりしも、昨年(明治二十九年)の俳況なりし。小説家、新聞記者は勿論のこと、こゝに辯護士の一團、かしこに醫者の一連、さては幫間、猫、杓子、悉く十七字を口にせざるものなかりしとは、吾れ人共に疑はざるところ。之を昨年(明治二十九年)の文壇に於ける俳句の氣焰と人いはし、我も亦然りと肯せざるに非ずといへども、而かも斯の如きは特に持て離して堂々たる文壇に於ける堂々たる俳句の氣焰と呼稱するに値すべきかは、暫く疑を存せざるべからず。我れ敢て俳人を以て自ら居り、獨り俳壇を脊負つて立つの勇氣あるものに非ずとい

へども、亦俳句の運命を、敢て小説家、新聞記者、辯護士、醫者、新聞、猫杓子輩に委棄し去つて、平然たるほどの香氣坊たるを能はず。若し夫れ、昨年、の文壇に於て、特に俳句の氣焰萬丈なりしことを眞とすれば、是れ、昨年、に至る迄、専門俳人の間に養はれ來りたる、強大なる俳句の潛勢力の、始めて、昨年、の文壇に至つて、暴發せしものには、非るか。彼の猫杓子の輩の、其の聲に驚き、其の光に眩したる、前後左右の、分別もなき、雷同模倣は、更に他の雷同模倣を呼んで、直ちに流行の聲となり、やがては所謂氣焰萬丈の大評判となり、了せしには、非るか。昨年、に在ては、屢、早稻田文學の彙報子に報導せられし、俳句流

行の文字の、本年に至つて殆ど跡を絶ち、更に衰退鎖沈等の忌むべきに似たる文字を以て迎へらるゝが如きは、却て雷同子、模倣子の一時の氣焰の上皮を剥ぎ去つて、其の運命の樞軸を握れる眞俳人の、専心研鑽の途に上り得へき秋來れるを報ずるものには、非るか。然り、俳句の樞軸を握れる眞俳人は、尙ほ健在なるよ。彼等は世評の風に、ただてらるゝ、波浪の外に在つて、優に其の運命を司りつゝあるなり。其の世人に見棄てらるゝに似たる、俳句現時の逆運こそ、やがて土を捲いて更に文壇に襲來する、第二の時期あるを豫告するものに、非ずや。昨年、の文壇に於ける、俳句の氣焰を、證明の將に

滅せんとする一閃光の如く見做す不覺者はやがて裸馬に鞭うつて胃を逆に着るの醜態を演ずるなるへしと或人は謂ふ。(明治三十年八月 國民新聞)

清水

清水は夏季景物中所謂積極美の尤なるものに屬し其の性寒冽なるのみならず又峻峭の氣を含むされば古人の俳句を見るに多く其の想若くは調の上に一種の勢力を含む例へば、
さゝれ蟹足這ひのぼる清水かな
芭蕉

の『足這ひのぼる』と特に其の調の緊密せる

引立て馬に飲まする清水かな
濠月

馬柄杓を岩にわり込む清水かな
野徑

の『引立て』『わり込む』等の動詞の勁健なるが如し又

穢多村の裏を逃げ行く清水かな
几董

も若し清水ならばれとなしく『流るゝ』なるべし而して是等の句は其の勢力悉くカイ子チツクなるに爰にポーションアルよりカイ子チツクたらんとする機微の勢力を現せる珍重の句あり。

馬の耳動き出したる清水かな
直生

爰に又全くポーションシアルにして、其の勢力殊に強大なる、
更に珍重すべき句あり。

石玉の鑿冷したる清水かな

蕪村

〔能く物の勢力のポーションシアルなるところに着眼して、莊
重の句を爲すは蕪村の特色なり。假令ば

五月雨や大河を前に家二軒

蕪村

遠淺に兵船や夏の月

同

絶頂の城たのもしき若葉かな

同

等枚舉に違あらず。其の他

帷子は淺黄着て行く清水かな

尙白

の自ら重厚なる、

後ろから馬の顔出す清水かな

一鼠

の滑稽なる、

玉あらば玉洗ひたき清水かな

江涯

の主觀的にして清麗なる等、古冊に残れる數百の清水の句
中、勝れて目出度きものなるべし。(明治三十年八月 日本人)

短夜

短夜の句は、其の宵を詠じたりと、曉を詠じたりと、夜中を詠
じたりとの三者あり。其の宵を詠じたりものは、

短夜や四條わたりは宵ながら

素外

短夜や止まんとしては橋の音

既白

等餘り多からず夜中を咏したるものは

短夜を眠らで守るや翁丸(老犬)

蕪村

明易き夜を泣兒の病かな

白雄

等尙はあるべし。其の曉を咏したるものに至つて、句も善く
數も多きは、短夜の趣味は主として明け離れたるところに
在りて、殊に眼にて打ち見たる景色の變化多き等、主なる原
因なるべきや。假令は

短夜や同心衆の川手水

蕪村

短夜や小店明けたる町外れ

同

短夜や毛虫の上に露の玉

同

短夜や伏見の扉淀の窓

同

短夜や芒生ひそふ垣の隙

同

之にても巨匠が生死岸頭に大自在を得たる吟境を覗ふべ
し。尙は吾人の記憶に値する句は、

短夜に敵のうしろを通りけり

几董

短夜の香をなつかしき一夜ぐさ

同

短夜や浪うち際のすて箒

蕪村

短夜や暇たまはる白拍子

同

同

短夜や二尺落ち行く大井川
等なるべし。(明治三十年九月 日本人)

俳句入門 終

明治三十一年四月十五日印刷
明治三十一年四月二十日發行

編輯者

發行者

印刷者

印刷所

發行所

定價金貳拾錢

高濱清
東京市神田區五軒町十
四番地

大橋又四郎
東京市本郷區上富士前
町二十番地

熊田宜遜
東京市神田區錦町三丁
目廿五番地

熊田活版所
東京市神田區錦町三丁
目廿五番地

少年園
東京府下北豐島郡上駒
込村十九番地
(電話本局四百參拾八番)



版權所有

東京市神田區
猿樂町廿五番地

少年園營業部發行

爲替換渡局は飯田町
便局郵券代用は一割増

詩學捷徑

第五版

上製定價金廿五錢郵税金四錢
並製定價金貳拾錢郵税金貳錢

篇を分ちて四篇とす、其第一篇作詩の心得と第二篇作詩便覽と第三篇作詩便覽と第四篇作詩便覽と、此書が優に幾多の作詩書を凌駕して、江湖の歡迎を受けし所以なり。即ち作詩の法則及び要訣を周到懇切に説明し、作詩便心得には、總て作詩の法則及び要訣を周到懇切に説明し、作詩便斬新にして且つ時勢に剴切な題目熟字を撰びて豊富なり。而して加せる作例は最も秀逸にして典型とすべきもの數百首を精選し、これに註解を施した韻字箋あり、通用文字あり。

「毎日新」初學者の爲め、必須のもの、廿五錢の定價決して不廉と云開は曰く、少年世界は曰く、一作詩の法を説きて剩す所無し、嗚呼此書一度出で、幼學便覽遂に顔色無からむか。少一作例清新、最も少、獨習書に適す。教育時論は曰く、國民は曰く、一作例清新、最も少、獨習書に適す。教育時論は曰く、詩心得を説き、以て作詩便覽に及びたるものは少し。

町田柳塘著

詩學大成

定價金拾錢 郵稅金四錢

本園曩に『詩學捷徑』を出版して大方の好評を博せしが、今亦新に『詩學大成』を發行するもの、捷徑は捷徑の便あり、大成は大成の用あればなり。而して此の卷は先づ其の絶句の部なり。

『詩學大成』上下二篇に別ち、上篇に於ては、専ら作詩の法と其用意とを詳説細論し、下篇に於ては、各種の詩三百有餘首を擧げて、詩意を解釋し、且つ其の作法、用意の要所を指示す。此の書詩學の初歩にある者の爲めに其の津梁たるべきは勿論、既に深く詩を知る人と雖も、亦下篇に於ては多大の趣味を感ずべし。何となれば三百有餘首の和漢大家の秀吟、直ちにこれ一卷の名家詩集を成すを以てなり。

作文捷徑

定價金二十五錢
郵稅金四錢

高等小學尋常中學の諸生に、作文の資料と指針とを授けんが爲に編したる良書にして、古人の成語詩歌典故等を蒐集し、通讀の際坐るに滾々たる文思を湧しめむことを期せり。作例として掲出する所、一齋岩陰拙堂益軒良齋徂徠等の古人のみならず、柳北鐵腸甕江怨軒龍溪等の近人に取りれるは甚だ當を得たるを信ず。世の少年子弟讀むで韋編三絶するに至らば、作文の道に熟達せんこと敢て難しとせず。(東京日々新聞) 本書は部門を時令、記遊、紀戰、傳記、文藝の五に分ち、あらゆる題目の下に、最も雅馴にして趣致ある成語熟句を收拾し、間々名家の作例を挿み、以て作文の資料に供せり。世の中小學校生徒にして、曩に同園が發行せる『作文大成』と並觀せば、此上の好伴侶やある。(國民新聞)

中學程度 作文大成

英文 定價 金參拾錢
 增補 再版 郵稅 金四錢

此書は分ちて六篇となす、曰く作文の要訣、曰く修辭學一斑、曰く文體の辨、曰く作文の軌範、曰く譯文法、曰く復文法なり。

第一篇作文の要訣は、廣く作文に關する古今内外の名論卓説を參酌し、且つ熟ら今日に於ける中等教育讀書科の程度を稽查して、學者の文を作るに、必ず先づ知らざる可からざる要訣數十則を説述し、第二篇修辭學一斑は、泰西修辭法の概略より、話色の効用彙類に説き及ぼし、我邦雅俗の文章に就て最も面白き適例を撮集せり。第三篇作文の軌範は、治く古今の名文中より、最も今日以後に於ける普通文の典則となすべきもの數十篇を精選し、一々文法字訣を剔抉して、文海の指鍼とせり。文を學ぶには體裁を知るを以て至要となす。是れ此書第三篇文體の辨ある所以なり。第五篇譯文法、第六篇復文法は、譯文及び復文の手段文法を説述して復た餘蘊なし。

詞藻

詩集 定價一冊 金八錢
 歌集及俳句集 郵稅一冊 金貳錢
 文集

天下快事多しと雖も、同好の士と文學の事を談論するより樂しきはなし。文學を樂む青年諸君よ、諸君は諸君と年齢を同くし、好尚を同くする満天下の青年文士と、文學を談論することを快とせざるや。此快を享けんを欲せば、右の青年文士の手に氣力火の如く、才情花の如く書を繙くに如かず。共に文章詩歌を蒐め、大家の削正を經、且つ其評語を加へたるもの、一讀積鬱立るに散じ、再讀文思忽ち滿ち來るべし。

少年園編纂



文翰書

定價金拾五錢 郵稅金二錢

六
文筆の事に於て、最も易きが如くして
其實最も難きものは、書翰の文なり。
書翰の文に於て、最も先とする所のも
のは、言簡にして意達するにあり、文
字平易にして用件の明白なるにあり、
而して之れを能くする者は至て少な
し。就中田舎の地に於て然りとす。教育普
及の今日にありても、書翰の文を満足
に認め得る者は百中五六のみ。本園が
今此の書を出版する所以のものこゝに
あり。此の書別ちて上中下の三篇となし、上
篇に於ては専ら日用萬般の文例を示
し、中篇に古名家の書翰文を萃め、下
篇を以て書翰の禮法、書方、用語心得
等を詳説せり。

袖珍



朗吟集

全二冊 定價金二拾錢
再版 郵稅金貳錢

山に登り、河に浮び、明月に對ひ、清風に嘯く、詩興湧然として生じ
制すべからず、乃ち會心の詩歌を朗吟せば心胸豁然たるものあらむ。
友を集めて一席の茶話會を開く、放談高語、興極まりて快正に熾なり。
此時一人あり劔を抜き起て舞ふ、琅々たる吟聲、閃々たる劔光、塵
上の人をして轉た感慨に堪へざらしむ。
此書斯る時の朗吟に適したる著名の詩歌數百首を撰ひ集めたる袖珍の
美本、殊に作者の小傳を附して其爲人を知らしめ、字句の稍や難き
ものはこれを標註し、歌は其大意を解釋する等、編輯の用意到れり盡
せり。

著郎一藤後士學工

書全術眞寫

錢四金稅郵 錢拾五金價定

此書は重に寫眞の技術を知得せんとする人の爲めに書き著されたる者にて、人物景色の撮影法は勿論、萬般の寫眞法より、臺紙に張り上げる迄の一切順序を、大小となく網羅し盡して殆んど餘蘊なく、且つ附録には當時有名なるレントゲン氏暗光寫眞法より、寫眞器械の定價表に至る迄丁寧反覆して之を示したる二百七十頁餘の大冊にして、文章も亦頗る平易なれば、何人と雖も一讀の下に撮影器具及び藥品の使用法等の巨細を理解し得べく、特に此道に志せる人は座右に備へざるべからざるの良書なり。(東京新聞)

渡邊修二郎著

高杉晋作

定價一冊金貳拾五錢
郵稅金二錢

高杉東行何者乎。侯爵伊藤、侯爵山縣等が先輩として、長藩第一流の士、夫の大西郷をして、一見其人物の非凡なるを嘆稱せしめたるものは、實に彼にあらざるや。茲に其詳傳なかるべからず、今著者は、傳記の文に於て一家を成したるもの如し。結搆排の如何は見て知るべし。外に其肖像及び書目次は下の詩を録して山縣狂介(今の山縣侯爵)に贈りたる扇面の眞蹟を添ふ。この詩を録して山縣狂介(今の山縣侯爵)に贈りたる扇面の目次を添ふ。幼少の教育、聖堂修學、上海行、脱獄、外館襲撃、長薩乖離、奇兵隊の編制、外國に避けしむるの企、薩藩兩黨の争、高杉の筑前、談判、西郷との密會、五卿引渡の拒絶、抗幕黨の對する長人の感情、高杉西郷再度の密會、征長兵の撤解、抗幕軍の交戦、長兵大捷、薩聯合郷就て高杉其性行諸評、附録、文詩集、最後の高杉

習文録

全三冊

定價金五十錢
郵税金六錢

第一卷は、文章を作るの方法、文を作るの工夫、文を作るの秘訣、文體、文題、文法を知らざるべからざる事、悲哀の文、慷慨の文、手紙の文及び滑稽の文等に分ちて、詳細に作文の法を説明し、且つ章毎に古人の作一篇つゝを附す。能文家とならんと欲するの士はそれ熟讀せよ。(日本人)

文

範

定價金十五錢
郵税金二錢

本書初めに本邦文章の沿革を叙し、次に學海居士の近體の文章を綴る法を載せ、其より源平盛衰記、太平記等より面白き筋を拔萃し、且つ馬琴、樂翁、綾足、一九、桃青、其角等の記事を拾録せり。文章を學ばんと欲する者には、此上なき参考と爲るべし。(讀賣新聞)

東京遊學案内

明治三十年七月
改正第十二版

定價金參拾錢
郵税金四錢

明治二十三年頃より毎年發兌し來りたるものにして、東京に遊學せんとする學生には頗る便利の書なり。注意周到、實に遊學生の好案内者なり。(國民之友)
遊學者の指針として、周到にして確實なり。地方少年の一讀を要す。(毎日新聞)

丁寧精察能く事情を盡せり。郷曲父兄も亦一本を備ふべきに似たり。(日本)

地方青年の爲には無二の津梁となすべし。(東京日々新聞)
「東京遊學案内」は斯の如き書なり。故に、既に東京に遊學せる者と雖も、常に一本を携へなば至大の便宜を得べく、笈を負うて將に上京せんとする者は勿論讀むべし、遊學の志あれど、東京遊學の事情に通ぜざるが故に、憂ふる所ありて、徒に雄志を抑ゆる者も讀むべし。東京學事の景況を知らんと欲する者も讀むべし。親愛なる子弟を東上せしめたる郷關の父兄も亦讀むべし。

著 郎 三 梯 縣 山

成 業 立 身 錄

錢貳稅郵 錢拾參金價定

中央新聞

少年の成業立身に關する順序、方法、注意と叮嚀懇篤に論ずる青年の爲め資益する所極めて多かるべし。吾人は、少年園主が、常に青年の好師友として、感化の廣

大なると謝せ
ずんばあらず。

毎日新聞

少年の伴侶と以て期する所、懇到精確なる少年の指針たるべき書なり。

國民之友

成業立身録は、少年、社會に出て、職業者に就く順序、各種の職業并に成業者に關する要件、成業立身の要訣并に處世法等と懇説し、少年必讀の書なり。

教育時論

少年として今後身と實業社會に投ぜん多き幾多の箇條、本分の良師好友を要訣等と説く。少年の良師好友を要訣等と説く。

『少國民』主筆、石井研堂著

海國偉人傳

定價 金拾五錢

郵稅 金貳錢

海の日本は自ら海の日本人を生ず。古來狂瀾怒濤を叱咤して、萬里の海を越え、偉勳を立てたる者甚だ多し。此書は此等大膽勇猛なる偉人數十人の事蹟を詳述したるものにして、冒險遠征の談、奇なること小説に優る。海の日本に生れたる者、誰かこれを讀みて壯心勃々たらざらむ。

渡邊修二郎著

自轉車術

定價 金參拾錢

郵稅 金貳錢

自轉車の乗用に熟練せんと希ふ者は速に此書を一讀せよ。此書は自轉車につきてあらゆる智識を與ふるもの、即ち其發達進歩の歴史より構造、種類、附屬器具取扱ひ法、費用等の細に至る迄、平易の文と數多の圖書とを以て詳に説明し、殊に其乗用運轉の方法及び注意要件は、最も懇切に丁寧に教示する所あり、故に此書に就きて學ばば、練習七日を出でずして必ず自轉車術に熟達することを得べし。

内案易貿及業工商

改正定價金拾五錢 郵稅金四錢

商業要件、歐米との貿易、支那及び印度貿易の三大部に分ちて、商業工業及び海外貿易に必要なあらゆる智識を示教せり。殊に高遠の理論を避けて、實際に近きを務むるは、此書の特長にして、既に商工業に従事せる者、又は將來商工業者とならんと欲する者の必讀すべき所以なり。新聞雜誌の批評に曰く、「平易の説明、卑近にして廣汎、通俗にして簡易」『東京朝日新聞』「極めて實地に切なり。」『報知新聞』「斯道に志すの少年子弟此書の如き者を把りて熟讀温習せば、其功益や決して鮮少ならざるべし。此書眞成に茫々たる商海に渡航する最良羅針盤たるを妨げずと謂ふべし。」

「明治評論」

小文庫

洋裝 合本第壹卷第貳卷第參卷

各卷自第一定價金三十錢 號至第六號 (郵稅共)

『小文庫』は『文庫』が青年諸子の機關雜誌なるが如く、少年諸子の機關雜誌となさんか爲めのなり。故に『小文庫』は少年諸子の手に成る記事、尺牘、紀行、日誌、種々 實用の文章を數多く掲載し、一々着實なる評を加へ、又は作文の力を養はしめんことを期せり。『小文庫』は又少年諸子の徳性を高め、其智識を増さしめんことを期するが故に、模範となるべき大人英傑の傳記、學術談、等を掲載すべし。而して成るべく六つかしく解し難き文章を用ゆることを避けて、平易にして面白く書さ下すを務めり。これを要するに『小文庫』を與ふると共娛樂をも齎らすべし。『小文庫』は少年諸子に甚だ多く利益を與ふからぬ娛樂を學校時に優るものは無かるべし。

文庫

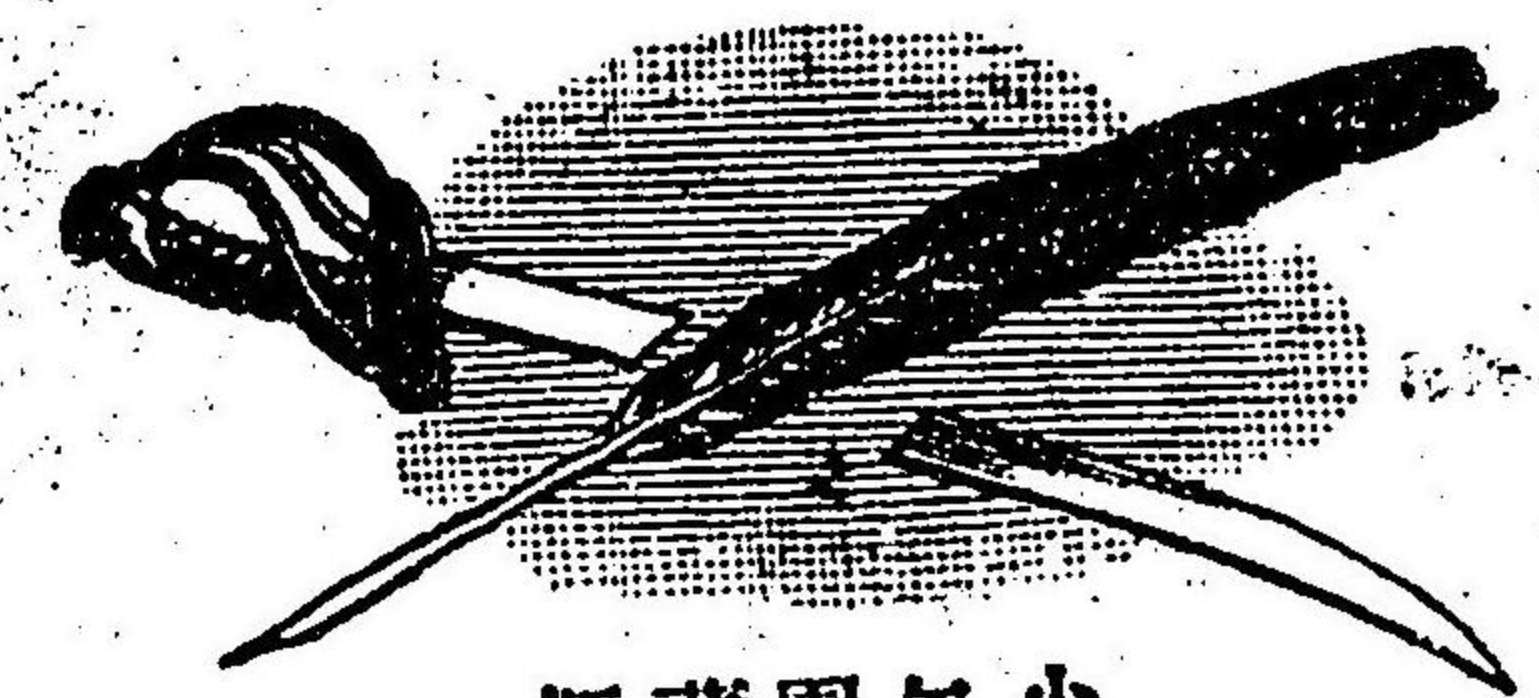
十六

毎月二回（五日、廿日）發行
一冊金十錢、三ヶ月分金五
錢、半年分金壹圓、一年分
圓八拾錢、郵税一冊金一錢

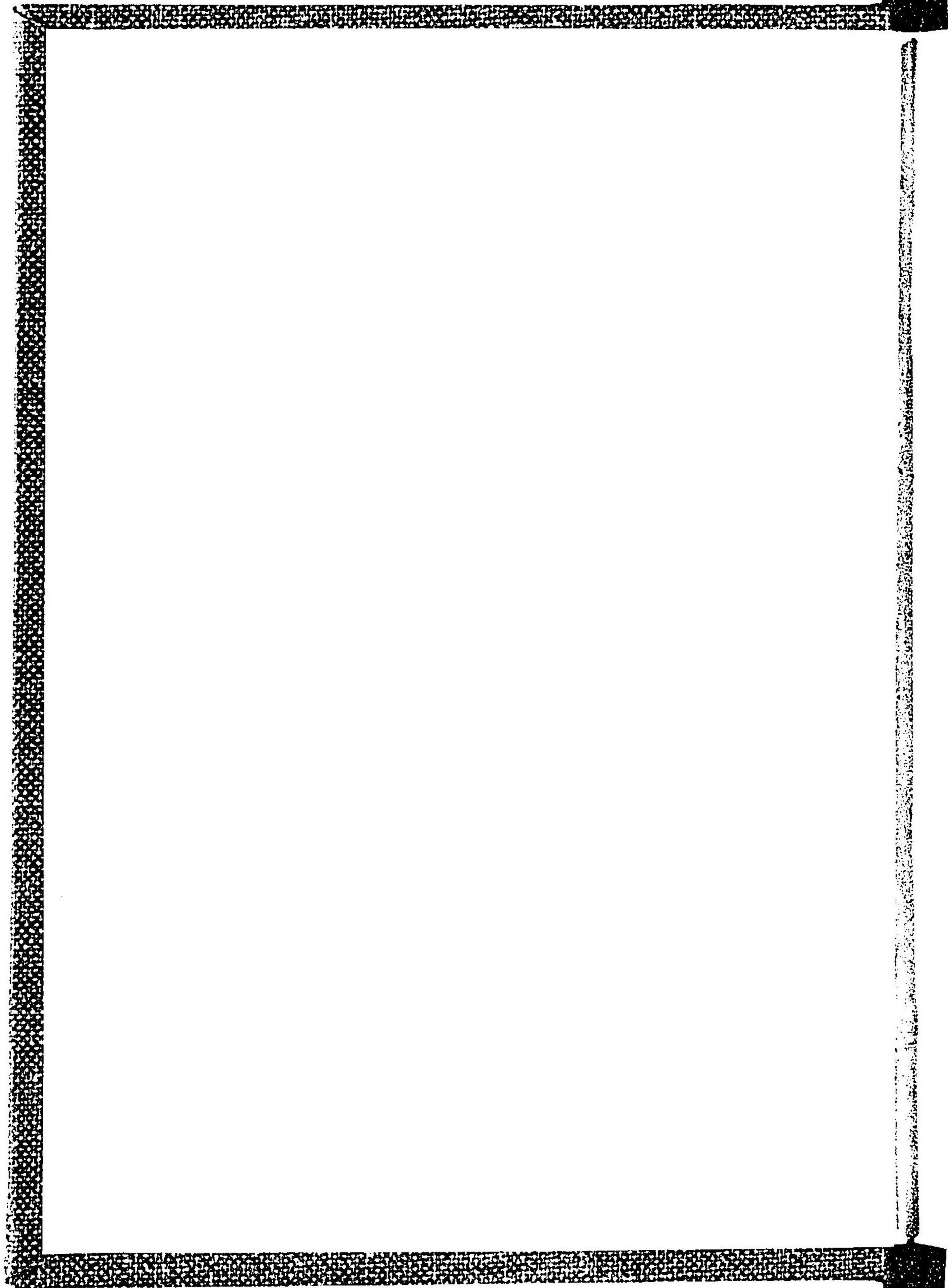
本誌は活氣鬱勃學識深高なる少壯文士の手に成れる青年の機關雜誌
り。其採録する所は悉く青年の手に成るものにして、實に今の青年を
て、磅礴する氣焰萬丈を吐かしむるに足る。其獨得の長所として他雜
の企て及ぶべからざるものは、毫も他の掣肘羈束を受くることなく、
はんと欲する所を言ひ、筆せんと欲する所を筆して忌憚せざるに在り
故に其評論は最も公明正大にして、眞摯直截、熱罵し冷笑し、而して其
文章は勁健奇拔、抑揚頓挫の妙を極め、波瀾萬丈の美を專にせり。沈滯
なる社會に活動を與へ、腐朽せる先進を抑へて萎縮せる後進を揚ぐ
は、これ本誌の目的なり。是故に、本誌は青年が手に成れる文藝上の近
作は、亦網羅して遺すことなし。記事の温雅にして豊富なる、雜録の
輕快にして飄逸なる、小説の奇抜にして清新なる、新體詩の瀟洒絢爛
なる、隨筆の奇變百出する、史傳の該博なる、詩、歌、俳句の洒落、
深刻、靈活なる、依て以て我青年の抱負雄大文思高遠を見るべく、又次
代國民の聲として、優に明治の文藝界に旗幟を翻すものといふべし。

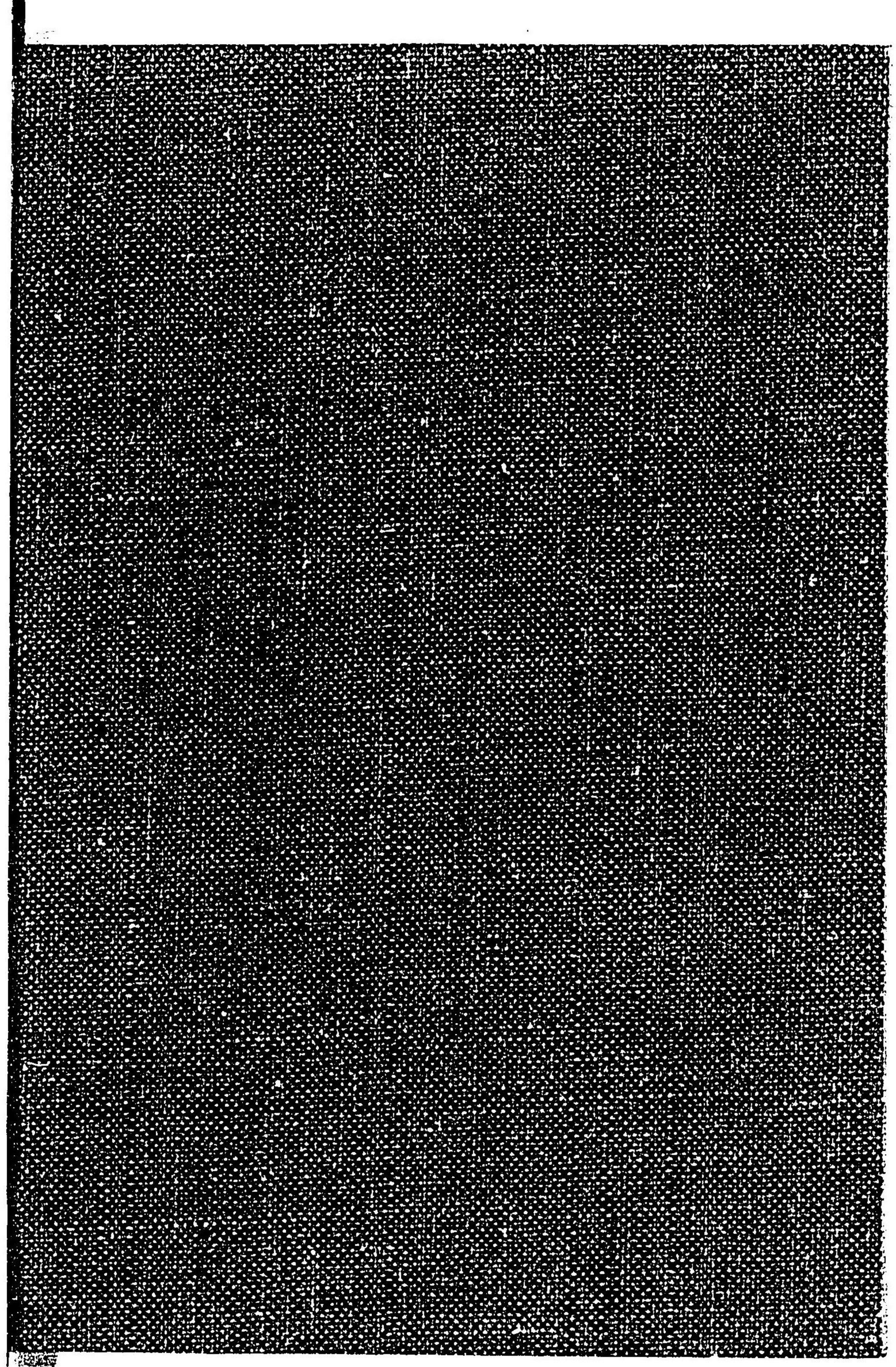
10

213792



少年園藏版





911.3

Ta214h2

禁
複
写

087443-000-2

911.3-Ta214h2

俳句入門

高浜 虚子/著

M31

DBE-0795



